

Title	サルトルの「像形成的意識 (la conscience imageante) 」 についての研究
Sub Title	Une étude sur la conscience imageante de Sartre
Author	荒金, 直人(Arakane, Naoto)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.25 (2010.) ,p.31- 55
JaLC DOI	
Abstract	画像とは何か? - サルトルは、この問いへの答えを、彼なりの仕方 で提供してくれているのだろうか。 1936年の『想像力』における問題提起は極めて興味深く、その問題 の分析が本格的に展開される1940年の『想像的なもの』(邦題『想像力の問題』) に期待が寄せられる。しかし我々がそこに見出すのは、なかなか突破口を開こうとしない、開いたはずの突破口を渡ろうとしない、慎重でじれったいサルトルである。想像力という観点から画像の問題に接近しようというのは、やはり無理だったのか。心的な像(心象) の経験と物質的な像(画像) の経験とが類似的な志向的構造を有しているという発想自体に、無理があったのだろうか。本稿では、『想像力』と『想像的なもの』においてサルトルが展開する像についての分析が、「画像とは何なのか」という我々の問いに対して何を与えてくれるのか、それを探ってみたい。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20100531-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サルトルの「像形成的意識 (la conscience imageante)」についての研究

荒 金 直 人

画像とは何か？——サルトルは、この問いへの答えを、彼なりの仕方提供してくれているのだろうか。

1936年の『想像力』⁽¹⁾における問題提起は極めて興味深く、その問題の分析が本格的に展開される1940年の『想像的なもの』(邦題『想像力の問題』)⁽²⁾に期待が寄せられる。しかし我々がそこに見出すのは、なかなか突破口を開こうとしない、開いたはずの突破口を渡ろうとしない、慎重でじれったいサルトルである。想像力という観点から画像の問題に接近しようというのは、やはり無理だったのか。心的な像(心象)の経験と物質的な像(画像)の経験とが類似的な志向的構造を有しているという発想自体に、無理があったのだろうか。本稿では、『想像力』と『想像的なもの』においてサルトルが展開する像についての分析が、「画像とは何なのか」という我々の問いに対して何を与えてくれるのか、それを探ってみたい。

(1) Jean-Paul Sartre, *L'imagination*, Paris : PUF, 1936. サルトル全集第23巻『哲学論文集』所収「想像力」平井啓之訳, 人文書院, 1957年。

(2) Jean-Paul Sartre, *L'imaginaire — Psychologie phénoménologique de l'imagination*, Paris : Gallimard, 1940 ; collection « Folio essais » avec la présentation d'Arlette Elkäim-Sartre, 2005 (以下の引用には2005年版のページ番号を記載する)。サルトル全集第12巻『想像力の問題』平井啓之訳, 人文書院, 1955年(初版) / 1975年(改訂版)。

I 『想像力』

1936年の『想像力』は、心象（心的な像）を事物的な存在（物が存在しているようにして存在しているもの）として捉える伝統的な理解に対する批判を、その中心的な課題とする。サルトルによれば、17～18世紀の哲学者たち（主にデカルト、ライプニッツ、ヒューム）は、心象と思考の関係について異なる立場を取るが（デカルトは両者を峻別して対立させ、ライプニッツは前者を後者に帰着させ、ヒュームは後者を前者に帰着させる）、心象を事物的に存在するものと看做す基本的な発想に関しては、それを共有していた（『想像力』第一章での論述を参照）。19世紀後半から20世紀前半に掛けての心理学や心理學を取り巻く諸思想（テヌ、テヌスに対する諸反動、ベルクソン、ヴュルツブルク学派など）においても、心象を意識の内に事物的に存在するものと看做す伝統的な理解は覆らなかった（第二章の論述を参照）。心象を事物的なものとして捉える理解は、長い伝統の中で受け継がれてきた哲学的な先入観であり、それが心象と思考の関係や心象と知覚の関係の正しい理解を妨げてきたとサルトルは考える（第三章の論述を参照）。では、その事物的な存在とは、どのような存在として特徴づけられるのだろうか。

サルトルは、『想像力』の「序説」の冒頭で、事物の存在様式と意識の存在様式とを区別する。事物は惰性的（つまり自動力を持たない）かつ即自的（自己同一的）な存在であり、意識は自発的かつ対自的（自己関係的）な存在であるとされる⁽³⁾。更に、徐々に強調されるように、意識は志向的な存在（対象への関係をその本質とする存在）としても特徴づけられる。したがって、〈私の一つの意識としての心象〉は、〈その意識が志向す

(3) 「意識にとって、存在するということは、自らの存在を意識するということである。」 *L'imagination, op.cit.*, p. 1. 邦訳前掲書8頁（ただし、本稿におけるサルトルの文献からの引用は、既刊の邦訳書を参考にしながら、全て引用者の責任で訳出し直されている）。

る事物」とは存在様式を異にする。たとえ、前者は後者を志向するという正にその限りにおいて、両者が内容的な同一性を有しているとしても、両者の存在様式は決定的に異なるのである。ところが我々は、往々にして意識存在の特殊性を忘れ、心象と事物とを同一の存在次元で捉えてしまい、心象を事物的な存在と看做すという誤りを犯してしまう。一つの意識であるはずの心象が物化され、惰性的・慣性的で自己同一的な客体と看做されてしまうのである。心象に対するこのような理解を、サルトルは、「心象についての素朴な形而上学」ないし「素朴な存在論」と呼ぶ⁽⁴⁾。この素朴な見方に従えば、「心象とは事物のコピーであり、それ自体が一つの事物として存在する」。更には、心象もまた、他の事物と同様に、何らかの仕方では知覚の対象となるものとして理解されることになる。このような心象の物化の極端な例が、古代原子論における像理論であり、そこでは、像とはある物体の外観をそのまま保ちながらその物体から離れて空中を飛翔する別の物体（最初の物体の「膜」ないし「表皮」）だとされる⁽⁵⁾。心象と事物の間に存在様式の違いを認めない素朴な存在論は、心象をある種の劣弱な事物と看做すことで、それをかろうじて他の事物から区別するのである。

サルトルによれば、デカルト以降の近代哲学においても、そしてその近代哲学が設定した概念体系の中で展開する近代の心理学においても、心象は常に事物的な存在として捉えられてきた⁽⁶⁾。では、心象を事物的に捉え

(4) *L'imagination, op.cit.*, p. 4. 邦訳前掲書10頁。

(5) 以下の文献を参照。Lucretius, *De rerum natura*, IV, 026-243 sq. ルクレティウス『万物の根源／世界の起源を求めて』塚谷肇訳、近代文芸社、2006年、142～148頁。

(6) ただしデカルト自身も、古代原子論の「空中を飛び回る小さな像」という発想を批判している。Descartes, *La dioptrique* (1637), AT, IV, 85. 『デカルト著作集1』所収『屈折光学』、青木靖三・水野和久訳、白水社、2001年、116頁。『屈折光学』でのデカルトによれば、視覚経験が成立するためには、視覚の対象から眼球まで物質的なものが伝達される必要はないし、対象について我々が抱く観念や感覚と類似的なものがその対象の中に存在する必要さえもない

るのが誤りだとすれば、それを別の仕方で捉えることで、つまりそれを一つの意識として捉えることで、一体何が見えてくるのだろうか。その答えが垣間見られるのは、フッサールを扱った第四章（『想像力』の最終章）においてである。

サルトルは、1913年のフッサールの著作『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』いわゆる『イデーニ I』が、心象なるものを正當に理解するための方法を提供してくれると考える。最初にサルトルが強調するのは、現象学が本質を探究する学問として構想されている点である。心理学が世界の中の事的存在としての（人間の）意識を研究する事実学であるのに対して、現象学は、世界の實在を定立する（すなわち超越論的な）意識の本質的構造を研究する本質学ないし形相学である⁽⁷⁾。サルトルは、本質学としての現象学が、「心象とは何か」という心象の本質に係わる問題への接近方法を提供してくれることを期待している⁽⁸⁾。

より具体的には、サルトルは、意識を特徴づけるのは「志向性」である

（『屈折光学』第一、四、五、六講などを参照せよ）。それでもサルトルは、デカルトはまだ心象を事物的に捉えていると言う。しかし、古代原子論と比較すると、デカルトの言う心象が随分と非物質化されたものであるということも確かである。デカルトにとっての心象とは、もはや「物質」ではないが、なおも「事物的」であると言うべきか。

(7) 『イデーニ I』の「緒論 Einleitung」を参照。特に *Hua* III, S. 6. フッサール『イデーニ I-I』、渡辺二郎訳、みすず書房、1979年、53～54頁。

(8) 「心理学は、曖昧で矛盾した諸経験の中でもたつくのをやめ、己の研究の対象である本質的諸構造を明確にし始めるとき、大きな進歩を遂げるだろう。例えば我々は、今しがた以下のことを確認した。すなわち、心象についての古典的な理論は、暗黙のうちに一つの形而上学を丸々抱え込んでおり、その形而上学を廃棄せずに、時にはアリストテレスにまで遡る多くの先入観を経験の中に持ち込みながら、実験に着手している。しかし、まず、一切の経験（それが実験の内観であれ他のいかなる手法であれ）に頼る以前に、そもそも心象とは何なのかを問うことはできないのだろうか。」「要するに、心理学とは、自らの形相的諸原理をなおも探し求めている一つの経験主義なのである。」「心象についての形相学を構築すること、すなわちその心理学的構造の本質を、それが反省的直観に現れるままに見定めて記述すること、これが試みられなければならない。」Sartre, *L'imagination, op.cit.*, pp. 142-143. 邦訳前掲書147～148頁。

という現象学に固有の発想と、この発想が含意する「対象の超越性」という発想とが、心象への全く新たな接近を可能にすると考える。サルトルは、フッサールに従って、意識は志向的であり、つまり「あらゆる意識は何かについての意識である」と考える⁽⁹⁾。そして、その「何か」(物理的に存在するとは限らない「何か」)は意識の外にあり、つまり「超越的」であるとされる⁽¹⁰⁾。ここでサルトルは、意識に内在的な「意識の内容」と、意識を超越する「意識の対象」との区別を重要視する。意識の「内容」とは、フッサールの用語で言えば「ヒュレー」(質料ないし素材)であり、対象への志向が成立するために必要な、意識に与えられた内在的な契機(知覚の場合は感覚与件)のことである。意識はこの「内容」をその構成要素として有しており、それが志向性が発動するための材料となるが、しかし、意識が意識しているのはその「内容」ではなく、それを通して意識の外部に見定められた「対象」である。

この点を踏まえた上で、サルトルは、心象を「意識の内容」とする見方(これが「素朴な形而上学」による心象の物化である)を退け、ある特定の仕方で「対象」に向かう意識の在り方こそが「心象」と呼ばれているのだと考える。意識が何かについての意識であるのと同様に、「心象も何かについての心象である」とサルトルは言う⁽¹¹⁾。心象は意識の中にあるのではない。意識の中にあるのは、心象を可能にする素材である。しかし、だからと言って、心象は意識の外にあるのでもない。意識の外にあるのは、心象がそれの心象であるところの対象である。つまり心象は、意識の内側や外側に事物的な仕方で存在しているのではない。とは言え、「心象」という言葉で名指すことのできるある種の経験、ある種の意識の在り方は、誰もが自身の経験に立ち戻ること、それを確認することができるはずで

(9) *L'imagination, op.cit.*, p. 144. 邦訳前掲書149頁。

(10) サルトルは、意識の対象がその意識自体であるような、反省的意識の場合を除外する。

(11) *L'imagination, op.cit.*, p. 146. 邦訳前掲書151頁。

ある。そこには、ある特定の志向的構造が見出されるはずである。サルトルは次のように言う。

心象は、一つの志向的構造と看做されることで、惰性的な意識内容という立場から、超越の対象と関係を持つ統一的で総合的な意識という立場へと移行する。私の友人ピエールについての心象は、ピエールを知覚することによって私の意識に残された痕跡としてのぼやけた燐光ではなく、独自の仕方て友人ピエールに関係する組織化された意識の一形式であり、ピエールという実在物に照準を合わせる可能な仕方の一つである⁽¹²⁾。

想像する意識が意識している対象は、意識の中にある像としての心象ではない。想像の対象が心象というある種の「もの」であると考えすることで、古典的な哲学や心理学は、実在物と心象の関係や、心象と思考の関係に関して、解決し難い問題に陥っていた。フッサールの観点はこの問題を一掃する。つまり、我々は一つの像を想像しているのではなく、一つの超越的な（つまり意識の外にある）対象を想像しているのである。

心象についての議論が、より広い意味での「像」の問題へと拡張されるのは、この地点においてである。サルトルは次のように述べる。

しかし、フッサールの示唆はこの点に留まらない。と言うのも、もし

(12) *L'imagination, op.cit.*, pp. 147-148. 邦訳前掲書153頁。ここで「心象」と訳出したのは「image」という単語である。サルトルは、同じ「image」という単語を、「心象」（心的な像）の意味で用いたり、「画像」（物質的な像）の意味で用いたり、両者を含むより包括的な「像」の意味で用いたりするので、その都度論述の流れを考慮に入れて訳出する必要がある。これを一括して「像」や「イマージュ」などと訳すことはできない。この単語の多義性は原典の読者をも混乱させており、サルトルの専門家でさえも、特定の文脈におけるこの単語の解釈に関して誤りを犯す場合がある。

心象というものが、意識が対象に照準を合わせるある特定の仕方に向けられた名前に過ぎないのだとすれば、物質的な像（絵画、デッサン、写真）を、いわゆる心的な像に近づけて考えることを妨げるものは何もないのである。〔中略〕もし心象が、ヒュレーの内容を志向的に賦活するある特定の仕方だと看做されるのであれば、ある画像の像としての把握を、「心的」内容の志向的把握と同一視することは、大いに可能であろう。それらはただ、「像形成的」意識の二つの異なる種類だということになろう¹³⁾。

つまり、サルトルによれば、①「心象」とはある事物に与えられた名称ではなく、対象へ向かう意識のある特定の志向的構造に与えられた名称である。そして、②意識が画像を（画像という一つの物体として知覚するのではなく）像として捉えるとき、つまりその像が表象する対象を意識するとき、その意識は「心象」の場合と同様の志向的構造を有している。つまり、「心象」という経験をする場合も、画像を像として経験する場合も、どちらも意識が「像形成的」に作用していると考えるのである。このようにしてサルトルは、心的な像経験と画像の像経験を同種の経験の二つの類型と看做す視点を提示する。このような視点は有効だろうか。

サルトルは、フッサールの分析を拠り所に、ある画像を一つの物体として知覚する場合（画像の知覚）と、その画像が表象する対象を意識の対象として経験する場合（画像の像経験）とでは、「ヒュレー」（ないし「印象的素材」）は同一だが、「志向的構造」が異なると考える¹⁴⁾。そしてサルト

(13) *L'imagination, op.cit.*, pp. 148-149. 邦訳前掲書153～154頁。「『像形成的』意識」と訳出したのは「consciences « imageantes »」。

(14) *L'imagination, op.cit.*, pp. 149-150. 邦訳前掲書154～155頁。サルトルはここで『イデーン I』の一節を引用する (*Hua* III, S. 226. 邦訳『イデーン I-II』渡辺二郎訳, みすず書房, 1984年, 183～184頁)。しかし、そこでのフッサールの議論はサルトルのそれよりも複雑で、両者は完全には噛み合っていない。この点については、後に「中立変様」を問題にする際に改めて論じる。「中立

ルは、フッサールの見解を拡張して、そこに心的な像経験と画像の像経験との構造的類似性という発想を持ち込み、像形成的意識一般の志向的構造を問おうとする（——フッサール自身は心象と画像を同次元で論じようとはしない）。つまりサルトルは、「画像の知覚」と「画像の像経験」とがヒュレーの水準では同一であるというフッサールの考えを起点にして、知覚一般と像経験一般（後者には「心的な像経験」と「画像の像経験」とが含まれる）とがヒュレーの水準では同一だと言えるのかどうか、つまり両者が志向的構造の差異のみによって区別されうるのかどうか、もしそうだとすれば像形成的意識一般の志向的構造とはいかなるものなのか、という問いを立てるのである。

しかし、その一方でサルトルは、フッサールが心象（心的な像経験）のヒュレーと知覚のヒュレーとを同次元に位置づけている（ように見える）点を指摘し、この点についてはフッサールが「古い考えになお囚われている」として、フッサールを批判している⁽¹⁵⁾。サルトルは、心象のヒュレーと知覚のヒュレーを同一視するというのは、心象を事物的に捉える「素朴な存在論」につながる見方だと考えたのであろう。そして、いくつかの

変様」について、サルトルは、ここでは軽く言及しながらも主題化することを避けるが、1940年の『想像的なもの』（邦題『想像力の問題』）の中では、これが、サルトルによって再解釈された形で、重要な役割を担うことになる。

- (15) *L'imagination, op.cit.*, pp. 151-152. 邦訳前掲書156～157頁。サルトルは、この解釈の根拠として、次の二点を挙げている。①フッサールは、空虚な志向を満たして直観的意識を形成するには、知覚か心象のどちらかがあれば良いと考えている。（この点については1940年の『想像的なもの』の中で改めて指摘されている。Cf. *L'imaginaire, op.cit.*, p. 118. 邦訳前掲書初版113頁／改訂版82頁。）②フッサールは、記憶としての心象は対象の知覚の再生産であり、知覚的意識の変様体であると考えている。——以上の二点である。更にサルトルは、心象のヒュレーと知覚のヒュレーが同一だとすれば、両者を区別するのは対象が実在するかどうかの違いだということになるが、世界の実在を括弧に入れて度外視し、意識への現れの描写に徹する現象学的な見地においては、その区別が成立しないのではないかと問う（*op.cit.*, pp. 153-155. 邦訳前掲書158～160頁）。

点について考察を深めた後に、サルトルは次のように述べる。

心的な像と知覚との区別が志向性のみに由来するということはありません。志向が異なるということは必要であるが、それだけでは充分ではない。素材も異なっている必要がある⁽¹⁶⁾。

しかし、知覚一般と像経験一般とのヒュレー的同一性を認めてしまえば、知覚と心的な像経験とのヒュレー的同一性というのは、その当然の帰結となろう。したがってサルトルは、画像の知覚と画像の像経験とのヒュレー的同一性を認めた上で、画像の像経験と心的な像経験との志向的構造上の類似性という考えを提示しながらも、両者の間のヒュレー的同一性を認めないのである。

すると、問われるべき問題が一つ残ることになる。「画像の像経験のヒュレー」に関しては、画像の知覚のヒュレーと同一だとされるので、その画像に由来する感覚与件としてそれを理解することができる。しかし、それとは異なるとされる「心的な像経験のヒュレー」とは一体何なのか。『想像力』第四章の最後のページでも、この点が問われている。「最後に、そしてとりわけ、心的な像に固有のヒュレーを研究せねばなるまい⁽¹⁷⁾。」『想像力』の続編である『想像的なもの』の中で、サルトルは、この問題に立ち戻るのだろうか。彼は、『想像力』の短い「結論」の最後に、「像」についての彼の考えを以下のように要約し、『想像的なもの』の中で現象学的な分析に着手することを約束する。

意識の中に諸々の像があるのではない。それはありえない。そうではなく、像とはある特定の類型の意識である。像とは作用であり、事物ではない。像とは何かについての意識である。

(16) *L'imagination, op.cit.*, p. 158. 邦訳前掲書163頁。

(17) *L'imagination, op.cit.*, p. 159. 邦訳前掲書163～164頁。

我々の批判的研究は、これ以上遠くまで我々を導くことはできない。今や、「像」構造の現象学的記述に着手せねばなるまい。我々はそれを他の著作の中で試みることになろう⁽¹⁸⁾。

Ⅱ 『想像的なもの』(A. 心象について)

1940年の『想像的なもの——想像力の現象学的心理学』（邦題『想像力の問題』）の第一部の冒頭には、「像の志向的構造」という見出しが掲げられており、1936年の『想像力』の問題系との強い連続性を感じさせる。ただし、そのすぐ後に記された言葉は、『想像力』の読者には見慣れないものである。

本書は、意識が有する「非現実化」という偉大な機能すなわち「想像力」と、そのノエマ的相関者である想像的なものとを記述することを、その目的とする⁽¹⁹⁾。

1936年の『想像力』の中では、想像力が「非現実化」の機能として特徴づけられたことはなかったし、そもそも「非現実化」という表現は見られなかった。フッサールの言う「中立変様」との関係を感じさせる言葉ではあるが、『想像力』の中では、サルトルは「中立変様」を主題化することを避けていた⁽²⁰⁾。ノエマとは、フッサールの用語で、意識の作用的側面（ノエシス）に相関的で不可分な意識の对象的側面のことであり、これを介して意識は対象を志向的に構成するとされる。サルトルは、「想像力」を意識の作用的側面のある特定の働きとして捉え、それに対応する对象的側面としての「想像的なもの（l'imaginaire）」の記述を試みると宣言して

(18) *L'imagination, op.cit.*, p. 162. 邦訳前掲書166頁。

(19) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 13. 邦訳前掲書初版8頁／改訂版6頁。

(20) *L'imagination, op.cit.*, p. 150. 邦訳前掲書155頁。

いるのである。ここで特に我々の関心を惹くのは、やはり「非現実化」という概念である。この概念が提供する新たな視点から、像経験の志向的構造が解明されるのだろうか。心象と画像の関係は、どのように位置づけられるのだろうか。

サルトルはまず、意識の対象の超越性について確認⁽²¹⁾、この点を見誤っていた「素朴な存在論」(ただしここではこの表現は用いられない)についての指摘を繰り返して⁽²²⁾、「心象」という言葉が指しているのは何らかの事物的な存在ではなく、対象へ向かう意識のある特定の志向的構造なのだという点が、少し表現を変えて改めて説明される⁽²³⁾。サルトルは『想像的なもの』第一部第一章で心象の四つの特徴を順に論じているが、その「第一の特徴」が今述べたことに対応し、それは「心象とは一つの意識である」という言葉で表現される⁽²⁴⁾。

それ以降の部分で、『想像力』には見られなかった新たな分析が展開さ

(21) 「私が私の内にピエールの像を生み出すとき、私の現在の意識の対象が〔ピエールの像ではなく〕ピエールであること、このことは確かである」。

L'imaginaire, op.cit., p. 15. 邦訳前掲書初版9頁／改訂版7頁。

(22) 「我々は、よく理解しもせずに、心象は意識の中にあり、心象の対象は心象の中にあるのだと、考えていた。」*L'imaginaire, op.cit.*, p. 17. 邦訳前掲書初版11頁／改訂版8頁。『想像的なもの』の中では、この誤った見方を指す言葉として、「内在性の錯覚」(illusion d'immanence)という表現がよく用いられる。「内在性の錯覚」についての詳しい説明は、『想像的なもの』第二部第五章「心的な像における物事の出現様態について」の前半を参照せよ。*L'imaginaire, op.cit.*, pp. 170-177. 邦訳前掲書初版165～174頁／改訂版119～125頁。

(23) 「心象という言葉が指し示しているのは、したがって、意識から対象への関係でしかありえない。言い換えるならば、それは対象が意識に現れるある特定の仕方であり、あるいはこう言っても良いが、意識が対象を自らに与えるある特定の仕方である。」「〔中略〕心象とは一つの関係に他ならないということに、ここで注意を促したい。私がピエールについて抱いている像形成的意識は、ピエールの像についての意識ではない。つまりピエールは直接的に到達されるのであり、私の注意はある像に向けられているのではなく、ある対象に向けられているのである。」*L'imaginaire, op.cit.*, pp. 21-22. 邦訳前掲書初版15～16頁／改訂版11～12頁。

(24) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 17. 邦訳前掲書初版11頁／改訂版8頁。

れる。まずは、心象の「第二の特徴」として挙げられている「準観察」的な性質についての分析である。サルトルはここで、同じ対象へ向かう意識の異なる在り方として、知覚と概念的思考と想像とを区別し、それぞれを以下のように特徴づける。①知覚は、対象を観察して対象を学習することで、対象についての認識を徐々に形成する。②概念的思考は、概念的に把握された限りでの対象を即時的に思考する。③想像は、対象に対して観察的な態度で挑みながらも、あらかじめ獲得されていた認識以上の何かがそこで学習されることはない。想像において我々は、対象の諸性質を受け止めようとする観察的な態度に身を置きながらも、我々自身が能動的に生み出す諸性質以上のものを受け取ることはできないのである⁽²⁵⁾。このような意味で、心象的意識の対象に対する我々の態度は「準観察」的であると言われる。同じ視点からサルトルは、知覚と心象の違いを次のように表現する。「要するに、知覚の対象は絶えず意識を溢れ出るのに対して、心象の対象は決してそれについての意識以上の何ものでもなく、その意識によって規定されるのである」⁽²⁶⁾。心象の対象はその対象についての意識によって規定される——このことは、心象の「第四の特徴」として挙げられている「自発性」に直結する。サルトル曰く、「知覚的意識は、受動性として自らに現れる。反対に、像形成的意識は、像形成的意識として、すなわち像状態にある対象を産出し保存する自発性として、それ自身に自らを与える⁽²⁷⁾。」——しかし、ここで心象の特徴として挙げられている準観察的態度や自発性は、画像の像経験には当てはまらないので⁽²⁸⁾、我々の考察にと

(25) 「ところで私は、私が望むだけ長い間、ある心象を私の眼差しのもとに留めておくことができる。しかし私はそこに、私自身が置いたもの以外のものを見出すことは決してないだろう」。 *L'imaginaire, op.cit.*, p. 25. 邦訳前掲書初版20頁／改訂版14頁。

(26) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 27. 邦訳前掲書初版21頁／改訂版15頁。

(27) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 35. 邦訳前掲書初版31頁／改訂版22頁。

(28) サルトル自身も、我々は画像を「観察する」と述べている。*L'imaginaire, op.cit.*, p. 51. 邦訳前掲書初版48頁／改訂版34頁。ちなみに、この箇所の邦訳前掲書における訳文は、「これに反して、心的な基盤を有するイマージュの場合

って、その重要性は相対的なものに留まる。

1936年の『想像力』においては展開されていなかった新たな分析としてもう一つ、そして我々にとって特に重要なのは、心象の「第三の特徴」として論じられている「像形式的意識はその対象を虚無として定立する」という特徴についての分析である⁽²⁹⁾。サルトルは次のように述べる。

あらゆる意識はその意識の対象を定立するが、定立の仕方はそれぞれ異なる。例えば知覚は、その対象を存在するものとして定立する。心象もまた、信憑作用あるいは定立作用を含んでいるが、この作用は四つの形式を、そして四つの形式のみを、取ることができる。すなわちそれは、対象を非存在のものとして、または不在のものとして、または他の場所に存在するものとして定立することができる。それはまた、自らを「中立化」することも、すなわちその対象を存在するものとして定立しないこともできる⁽³⁰⁾。〔中略〕これらの定立作用は、——これは極めて重要な指摘であるが——一旦構成された心象に後から付け加わるのではない。定立作用が心象意識を構成するのである⁽³¹⁾。

あらゆる意識は、その意識を超越する対象（その意識に内在しない対象）を意識の外部に「定立する」（すなわち何らかの存在様式のもとで成立しているものとして意識する）。知覚という意識は、対象を「存在するもの」として定立する。心象という意識は、対象を別の仕方で（対象を「存在するもの」として定立しない仕方）で定立する。そして、このような定立の仕方こそが、その意識を「心象」という意識にしている。これがサル

には……」となっているが、これは「物理的な基盤を有する (à base physique)」の誤りである。

(29) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 30. 邦訳前掲書初版25頁／改訂版18頁。

(30) 「信憑のこのような中断も定立的作用であることには変わりない」〔サルトル自身の脚注〕。

(31) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 32. 邦訳前掲書初版27頁／改訂版19～20頁。

トルの考えである。そして、心象に固有の四つの定立形式をまとめる表現が、上述の、「像形成的意識はその対象を虚無として定立する」という言い方である。他にもサルトルは、「心象はその対象を存在の虚無として与える」という言い方もしている⁽³²⁾。これが、『想像的なもの』第一部冒頭で言われていた「非現実化」の機能に対応することは、内容的に見て間違いないだろう。

サルトルは、対象の存在に関する定立を行わないことで自らを「中立化」する意識の在り方を、心象としての意識の四つの定立形式のうちの一つと看做している。この「中立化」という概念が、フッサールの「中立化」ないし「中立変様」という概念のサルトルによる再解釈的な受容であることは明らかだが、その用法には若干の違いがあるので、この点を確認しておきたい。サルトルが『想像力』の中で引用し⁽³³⁾、『想像的なもの』の中でも言及している⁽³⁴⁾『イデーニ I』第111節「中立変様と想像」の中で、フッサールは、中立変様一般と想像一般とがそのまま混同されてはならないとした上で、想像は中立変様の一つの形であるとして、これを論じている。フッサールは次のように言う。

もっと細かく述べるならば、想像作用とは一般に、「定立的な」準現前化の中立変様なのであり、したがって、考えられうる最広義における想起の中立変様なのである⁽³⁵⁾。

ここで「想像作用 (das Phantasieren)」とは、「想像すること」ないし「想像するという働き」を意味する。「準現前化 (Vergegenwärtigung)」は「現前化 (Gegenwärtigung)」と対になる概念であり、後者が対象の

(32) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 33. 邦訳前掲書初版28頁／改訂版20頁。

(33) *L'imagination, op.cit.*, p. 149. 邦訳前掲書154頁。

(34) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 55. 邦訳前掲書初版52頁／改訂版37頁。

(35) Husserl, *Hua* III, S. 224. 邦訳『イデーニ I-II』前掲書181頁。

現前を直接的に経験する経験の基本形式を指すのに対して、前者は現前しない対象を記憶や想像や予期によって言わば間接的に経験する意識の働きを指す。「中立変様 (Neutralitätsmodifikation)」ないし「中立化」(フッサールは形容詞「neutral」や過去分詞「neutralisiert」を多用する)とは、ある意識がその意識の対象に関する一切の信念を中断し、言わばただ単に意識するだけの意識になることである。フッサールは、①対象を現前的に経験してその対象を定立する意識が知覚であり、②その知覚を再現前化することで対象を定立する意識が想起であり、③その想起を中立化して対象の定立を行わないのが想像であるとする。つまり想像は想起の変様体だということになる。

サルトルは「像形式的意識はその対象を虚無として定立する」と言うが、その場合の「虚無として定立する」とは、対象を非現前的なものとして定立する場合と信憑を中断して定立を停止する場合とを含むので、フッサールの「中立変様」と同一ではないが、類似的な概念だと言える。しかし、サルトルが、知覚と心象の差異を〈意識による対象の存在定立の様式の差異〉に基づいて説明しようとしているに留まるのに対して、フッサールは、想像作用を知覚の再現前化である想起の中立変様だと看做すことで、知覚と想像の差異を(サルトルに類似的な仕方)で説明するだけでなく、更に、想像を〈知覚の変様体(すなわち想起)の変様体〉と看做す立場を打ち出している。ところがサルトルは、既に確認したように、『想像力』の中で、フッサールが心象のヒュレーと知覚のヒュレーを同一的なものと看做しているように見える点に関して、フッサールを批判していた。サルトルは、心象と知覚の違いを、志向的構造の違いと素材(ヒュレー)の違いの両方に求めており、心象を知覚に基づけるような発想には批判的である。もっとも、フッサールがここで論じる「想像」と、サルトルが論じる「心象」とを、単純に同一視することはできない。フッサールの「想像」はあくまでも「想起」の中立変様であるが、サルトルが論じる「心象」がこのような限定を受けられるとは思えない。心的な像経験と画像の像経験を「像

形成的意識」という共通の枠組のもとで理解しようとするサルトルが視野に入れているのは、知覚の内的な再生産としての「想起」を起点とするような狭い意味での心象（フッサールの言う「想像」）ではなく、おそらくは現在的な知覚においても同時に作動しているような、より広い意味での像経験のはずである（——この方向での考察には深入りしないことにする）。

しかし、ここで極めて興味深いのは、フッサールが、「想起」という段階を経ずに「知覚」がそのまま中立変様した場合について論じている点である。しかも、ここでは、画像についての経験が主題化されている。フッサールは、『イデー I』の同じ第111節の後半で次のように述べている。

例えば、正常な知覚、つまり変様されていない確信をもって定立的働きをするところの知覚が、中立変様させられればどうなるかと言えば、それが中立的な写像客観意識であり、〔……以下略〕³⁶⁾。

フッサールはここで、定立的な現前化である通常の知覚をそのまま中立変様した場合の意識の在り方の一例として、「中立的な写像客観意識」すなわち〈客観（ここでは「客体」の意味）としての写像ないし画像についての中立的な意識〉を挙げている。この意識について説明するために、フッサールは、以下の三つの意識を区別する。①画像（フッサールの例ではデューラーの銅版画「騎士と死と悪魔」）を一事物として知覚する意識（「正常な知覚」）、②画像において（そして画像によって）表象された対象（「美的鑑賞」の対象、すなわち銅版画によって表象された対象としての騎士など）に向けられた意識、③その表象された対象を意識することを可能にするがそれ自体には注意が向けられていない「写像客観」ないし「写像客体」（Bildobjekt）（銅版画の描線や明暗）に対する知覚的意識。この第

³⁶⁾ Hua III, S. 226. 邦訳『イデー I-II』前掲書183頁。

三の意識が、「知覚の中立変様の一例」と看做されるのである。

既に確認したように、『想像力』の中でサルトルは、フッサールのこの分析に依拠しながら、「画像の知覚」（画像を一事物として知覚すること）と「画像の像経験」（表象された対象を意識すること）との間の、同一性（ヒュレーに係わる）と差異（志向的構造に係わる）について分析した。そして、「画像の像経験」と「心的な像経験」の志向構造上の類似性を想定した。しかし、フッサール自身にとってここで問題になっているのは、むしろ、〈意識の対象としての画像を定立的に知覚すること〉（通常の画像知覚）と〈像経験を駆動している限りでの画像を非定立的に知覚すること〉（中立化された画像知覚）との間の差異なのである。つまり、サルトルにとっては像経験の対象（すなわち画像において表象された対象）の存在の中立化が問題になっているのに対して、フッサールの分析においては、像経験を支える知覚的意識の対象（すなわち描線や明暗を有する事物としての画像）の存在の中立化が問題になっているのである（ただしフッサールは、『イデーン I』111節の最後の部分で、表象された対象（「その模写されているところのもの」）の中立化についても言及している）³⁷⁾。サルトルの考察とフッサールの考察が、この点について完全には噛み合っていないということを理解した上で、『想像的なもの』第一部第二章における画像の分析に注目しよう。

37) フッサールのこの分析が浮き彫りにする〈像経験を支える知覚的意識の対象の存在の中立化〉という事態は、ロラン・バルトが『明るい部屋』の中で写真の特徴として注目し、彼が自らの写真論を展開する上でその起点とした、〈写真画像と被写体との密着性〉という事態と、非常に近い位置にある。バルト曰く、「写真が何をを見せていようとも、そしてどのような仕方で見せていようとも、写真はいつも目に見えない。つまり、人が見ているのは写真ではないのだ。」Roland Barthes, *La chambre claire. Note sur la photographie*. Paris : Cahiers du Cinéma / Gallimard / Seuil, 1980, § 2, p. 18. ロラン・バルト『明るい部屋——写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1985年、12頁（ただし引用は引用者による訳出）。バルトの写真論にとってこの特徴がいかに重要であるかという点については、次の著作を参照されたい。荒金直人『写真の存在論——ロラン・バルト『明るい部屋』の思想』、慶應義塾大学出版会、2009年。

Ⅲ 『想像的なもの』(B. 画像について)

『想像的なもの』第一部第二章「像の同族」の中でサルトルは、心象についての問いを、画像を含む「像」一般についての問いへと拡大する。サルトルは次のように言う。

例えば、外部世界には、やはり像 (images) と呼ばれる諸対象 (肖像, 鏡の中の反射像, 模倣など) が存在する。これは単なる同形異義なのだろうか。それとも, これらの対象を前にした我々の意識の態度は, 我々の意識が「心的な像」の現象の中で取る態度と, 同一視されるのだろうか⁽³⁸⁾。

サルトルはまず、ある不在の対象 (サルトルの例では友人ピエール) に向かう意識としての心象と、その同じ対象を映し出す写真と、その同じ対象を描き出す戯画とが、「そこにはいないピエールの表情を私に現前させる」という同じ目的を共有していると考える⁽³⁹⁾。更に彼は、心象と写真と戯画はいずれも、対象の直接的な知覚が不可能である場合に、それを代理する「類似物」として機能すると考える⁽⁴⁰⁾。ここでサルトルは、写真や戯画とは異なり事物的な存在ではない心象 (心的な像) の「素材」をどう考えるべきかという、1936年の『想像力』の中で未解決のまま残されていた問題に改めて言及しながらも、その点についての考察を先送りにして、と

(38) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 40. 邦訳前掲書初版36頁／改訂版26頁。ここで「像」と呼ばれる諸対象の一つとして挙げられている「模倣 (imitations)」とは、誰かが他の誰かの物真似をするような場合のことを指している。模倣者が模倣される人物の「像」になるとされる。Cf. *L'imaginaire*, Première partie, II, III : « Du signe à l'image : la conscience des imitations », *op. cit.*, pp. 56-64. 邦訳前掲書初版53～61頁／改訂版37～43頁を参照せよ。

(39) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 41. 邦訳前掲書初版37頁／改訂版27頁。

(40) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 42. 邦訳前掲書初版38頁／改訂版27頁。

りあえずは、画像（写真や戯画）へ向けられた意識と、心象という意識とは、「同じ部類ないし同じ類型の志向性」であり、「機能上同一の素材」を有していると看做されうると言う⁽⁴¹⁾。このようにしてサルトルは、画像の像経験と心的な像経験とが類似的な志向的構造を有しており、両者は「像形成的意識」として一括して論じられうるという、『想像力』の中で提示した発想を、ここで改めて主題化する。そしてこの文脈で、サルトルは、「像」(image) 一般の定義を提示するのである。

したがって我々は次のように言うことができよう。像とは、不在もしくは非存在の対象を、物理的あるいは心理的な内容を通じて、その対象の物体性において狙う作用であり、その内容は、それ自体として与えられるのではなく (qui ne se donne pas en propre), 狙われた対象の「類似的表象体」の資格で与えられる⁽⁴²⁾。

像が「対象」としてではなく、対象を狙う「作用」として定義されていることに注目しよう。心象だけでなく、画像もまた一つの作用（対象に照準を合わせる作用）であり、つまり一つの意識だと言うのである。そしてこの意識（像形成的意識）は、物理的もしくは心理的な「内容」を介して、しかしその「内容」それ自体には意識を向けることなく、対象を（その「物体性」において、つまり概念的把握とは別の仕方）意識するとされる。更に、この「内容」は、対象と何らかの仕方です「類似的」であり、その類似性によって対象を「表象」とされる。この「内容」とは一体何を指しているのだろうか。『想像力』の中でサルトルは、これを「ヒュレー」と呼んでいた。と同時に、これは、フッサールの言う「中立的な写像客観意識」における「写像客観」（つまり画像の像経験を可能にするがそれ自体には注意が向けられていない知覚的契機）に正確に対応しているよ

(41) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 43. 邦訳前掲書初版39頁／改訂版28頁。

(42) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 46. 邦訳前掲書初版42頁／改訂版30頁。

うにも思われる。中立化された「写像客観」をそのまま一つの「ヒュレー」と看做することがフッサールの見地から可能なかどうかの判断は難しいが、ここではその点にはこだわらずに、次の点に注目しよう。すなわち、「類似的表象体」という一見すると大雑把な概念のもとで、実はサルトルは、「中立的な写像客観意識」についてのフッサールの繊細な分析に対応するような視点を提供しているのである。たしかにフッサールは類似性という言葉は使わないが、「変様」という概念が、それに近い役割を担っているとも考えられる（「中立的な写像客観意識」は知覚の変様体だとされている）。

サルトルがここで「物理的あるいは心理的な内容」と呼び、「類似的表象体」と呼ぶものを、彼自身は、画像経験においてはその画像そのものに求め、心象においては心象を可能にする何らかの体験（感情や身体運動や言語に係わるもの——この点については『想像的なもの』第二部で詳しく論じられている）に求めていると、とりあえずは言える。しかし、その「内容」ないし「表象体」は、「それ自体としては与えられない」とサルトルは言っている。この言葉をどこまで深く受け止めるかによって、理解の仕方は少し変わってくる。それを比較的浅く受け止め、おそらく一般的なサルトル解釈がそれを受け止めている次元（サルトル解釈としてはおそらく正当な次元）に留まるならば、画像の像経験における「類似的表象体」とは、つまり、物質的媒体としてのその画像そのものだということになるだろう⁽⁴³⁾。しかし、それをより深く受け止め、フッサールが「中立的な写像客観意識」を分析している水準で捉え直すならば、それは、像経験における非顕在的な知覚的契機として捉えられ、要するに、その「表象体」を

(43) 例えばエリプス出版の『サルトル事典』の「類似体 analogon」の項目には、「類似体、すなわち狙われた対象に類似的な物質的媒体」と記されている。Philippe Cabestan, *Dictionnaire Sartre*, Paris : Éditions Ellipses, 2009, p. 20. オノレ・シャンピオン出版の『サルトル事典』の「類似体 analogon」の項目も参照せよ。*Dictionnaire Sartre*, sous la direction de François Noudelmann et Gilles Philippe, Paris : Honoré Champion Éditeur, 2004, pp. 30-31.

一つの独立した存在として認める視点は取られないだろう。フッサールの視点からは、上述したように、画像の存在自体が中立化されるのである。我々には、このフッサール寄りの視点が、より適切であるように思われる。と言うのも、サルトルが心象の「事物化」を避ける必要性を説いていたその考え（「素朴な存在論」や「内在性の錯覚」に対する批判）を受け容れるならば、そして心象経験と画像の像経験との構造的類似性を探ろうというのであれば、画像における「類似的表象体」の事物化もまた、避けられるべきものだと思われるのである（——心象における「類似的表象体」の事物化も、当然避けられるべきである）。サルトルの分析は、この点に関して徹底性が欠けているように感じられる部分があり、それが、本稿冒頭で言及したもどかしさの原因の一つとなっている⁽⁴⁴⁾。

さて、サルトルによる「像」一般の定義を確認したところで、サルトルが画像について論じている決定的な部分を引用し、それについて考えてみたい。『想像的なもの』第一部第二章第二節（「記号と肖像」の節）において、サルトルは、記号と肖像（肖像画や肖像写真）の間の共通点と差異について論じている。まずは両者の共通点について、サルトルは次のように述べる。

記号の場合も、像〔ここで問題になっているのは肖像画や肖像写真〕の場合も、我々はある対象を狙う一つの志向を有しており、その志向が変形させる一つの素材を有しており、不在のまま狙われている一つの対象を有している。一見すると我々は、同一の機能に係わっているように見えるかもしれない⁽⁴⁵⁾。

記号を経験する場合も、画像を像として経験する場合も、ある志向がある

(44) しかし、この点に関するサルトルの徹底性の欠如は、好意的に解釈すれば、フッサール的な意識中心主義に対する批判的立場として理解することもできる。

(45) *L'imaginaire*, *op.cit.*, p. 48. 邦訳前掲書初版44頁／改訂版32頁。

素材を介してある不在の対象に向かうという点は同一である。では、両者の差異は何なのか。ここでサルトルは、画像とは何なのかという問いへの回答になるような形で、以下の四点において画像を規定している⁽⁴⁶⁾。①画像の物理的特性と、それを介して我々が志向する対象との間には、類似性の関係があり、その類似性が対象への志向を促している（——それに対して記号は恣意的である）。②我々は画像を「観察」し、その観察に従って、その対象についての像形成的意識を豊かにする（——それに対して、記号は目印でしかないので、我々はそれを観察しない。心的な像の場合には、我々は上述の「準観察」的な態度を採る）。③あらゆる画像には、必ず対象に対する定立的な規定がある。画像が対象を実在するものとして規定していない場合でも、そのことは言える。より具体的に言えば、画像に基づく像経験の対象は、画像があるその場所には不在のものとしてではあるが、それでもやはり定立されるのである（——それに対して、記号を経験する意識は、少なくともそのものとしては、対象を定立しない。記号経験とは意味の経験であり、その対象は一つの意味であって、一つの存在ではない）。④したがって、画像は対象を「与える」と言える（——それに対して、記号は対象を指示するだけで、与えはしない）。この最後の点について、サルトルは次のように述べる。

以上のことから我々は、記号と像との間に、最後のそして最も重要な区別を認めることになる。私は画像の中にピエールを思念する、と我々は言った。このことは、私は画像を全く思念せずにピエールを思念する、ということの意味する。したがって、私が画像を「ピエールの像として」思念するのだと信じてはならない。このように信じるのはある反省的な意識であり、この反省的意識が、私の現在的な意識の中に、画像の機能を開示するのである。この反省的意識にとっては、

(46) Cf. *L'imaginaire, op.cit.*, pp. 49-54. 邦訳前掲書初版45～51頁／改訂版32～36頁参照。

ピエールと画像とは二つの別のもの、区別された二つの対象である。しかし、像形成的な態度においては、その画像は、ピエールが不在のものとして私に現れる一つの仕方以外の何ものでもない。このようにして画像は、ピエールがそこにいないのにもかかわらず、ピエールを与えるのである。記号は、それとは逆に、記号の対象を与えはしない⁽⁴⁷⁾。

画像は対象（ピエール）を「与える」すなわち経験させる。画像を像として（「像形成的」に）経験するとき、我々が経験しているのは、像ではなく、その像がその像であるところの対象である。その対象への参照指示という記号的な働きを経験しているのではない。その対象それ自体が、そののみが、つまりその存在が、経験されるのである（——ただしこの存在経験は記号経験が同時に生起することを妨げるものではない。また、ピエールの像がその像であるところの対象とは、たしかにピエールに他ならないが、それはあくまでもその像が経験させる限りでのピエールであり、そのピエールがどのピエールなのかという問題が残っている。この点に關しては、肖像画と肖像写真の場合で別個の考察が必要になるだろう）。しかもその経験の対象は、不在のものとして経験される。不在のものの存在経験という奇妙な事態が、ここで成立していることになる⁽⁴⁸⁾。

(47) *L'imaginaire, op.cit.*, p. 54. 邦訳前掲書初版50～51頁／改訂版36頁。この引用文中で「画像」と訳されているのは「tableau」, 「像」と訳されているのは「image」。この文の少し後でサルトルは、次の二点について補足している。①ただし、ピエールが実在するものとしては与えられない場合もある。②そもそも像形成的意識が明確に発動しない場合もある。*L'imaginaire, op.cit.*, p. 55. 邦訳前掲書初版51～52頁／改訂版37頁。

(48) サルトルがここで画像経験の特徴として抽出する〈不在のものの存在経験〉というこの事態こそが、まさに、ロラン・バルトが『明るい部屋』の中で写真経験の本質と見定めた当のものである。『明るい部屋』の巻頭に記された「サルトルの『想像的なもの』に捧ぐ」という言葉の意味も、このことから理解されるべきだと思われる。前掲書『写真の存在論』を参照されたい。

ここでサルトルが挙げる四つの特徴は、画像一般の特徴をかなり説得的に表現しているように思われる。我々としては、ここで抽出される〈不在のものの存在経験〉という特徴と、フッサール寄りの解釈として浮上した〈画像の存在自体の中立化〉という特徴を、「画像とは何なのか」という我々の問いに対してサルトルが与えてくれたヒントとして、とりあえず心に留めておきたいと思う。

* * *

『想像的なもの』第一部（「確かなこと」と題されている）を読み終えた時点で、心象のヒュレーについての問いは、まだ解明されていない。むしろ、問題の度重なる先送りが、一種の不信感を惹き起こしさえする。第一部の終わり近く箇所で、サルトルは次のように述べる。

肖像についての私の像形成的意識の素材、それは無論、その描かれた画布であった。心的な像の表象的素材に関しては、反省的記述は直接的には何も教えてくれないということを、認めざるをえない⁽⁴⁹⁾。

画像の像経験の素材はその画像自体（「その描かれた画布」）であるとサルトルは言う。我々は、その画像自体の存在は、その画像の像経験においては中立化されている（すなわち何らかの仕方では存在しているものとして意識されていない）という点を強調したい。そしてサルトルは、心象の素材を反省によって直接的に捉えることはできないと言う。我々は、この点に関してはサルトルに同意する。心象を物化する「素朴な存在論」ないし「内在性の錯覚」を乗り越えようというサルトルの基本的な立場に同意するからである。しかしサルトルは、この数行後で、次のように付言している。

⁽⁴⁹⁾ *L'imaginaire, op.cit.*, p. 111. 邦訳前掲書初版107頁／改訂版76頁。

要するに我々は、心的な像の中には類似体として機能する物理的与件があるということを、それが本質的な必然性であるという理由で、知ってはいるのだが、しかし、その与件の性質と構成要素とをより明確に特定しようとする、推測する以外にしようがなくなってしまうのである⁽⁵⁰⁾。

はたして我々は、心象が対象の類似体としての素材を「物理的与件」として有しているということを「知っている」のだろうか。サルトルはそれが「本質的な必然性」だと言う。我々にはそれが、経験への忠実さを忘れた理論的構築に思えてならない。心象という〈意識の志向的な状態〉がある特定の物理的・身体的な条件（私の身体がある特定の状態であること）を要請するということは理解できるが、そのとき、経験の主体としての私に物理的な何かが与えられている必要はあるのだろうか。そして、もしその必要があるのだとすれば、そのとき「与えられている」とは何を意味するのだろうか。——思い切って、心象そのものには素材など存在しないと言うことはできないのか。それを言ってしまうと、心象経験と画像の像経験との構造的類似性というサルトルの発想自体が、成り立たなくなってしまうのだろうか。画像の像経験の素材（すなわち画像それ自体）がその像経験においては中立化されている（つまりその存在が定立されていない）という考えを心象の場合にも適用して、心象経験の素材も中立化されていると考えることができるのではないか。そして、中立化されているということ、つまり存在定立が為されていないということは、ある意味で、存在しないということではないのか。——しかし、『想像的なもの』第二部以降のサルトルの考察は、そのような方向には進まない⁽⁵¹⁾。

(50) *L'imaginaire, op.cit.*, pp. 111-112. 邦訳前掲書初版107～108頁／改訂版77頁。

(51) 本研究は、平成21年度慶應義塾学事振興資金（個人研究 A「画像・映像についての哲学的研究」）による補助を受けたものである。